

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

●京都大学 地球環境学舎

「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

本教育プログラムにおいては、国内外におけるインターンシップ・フィールドワークを基軸としたミニプロジェクトワークを実施した。可否を判定する基準は厳格に設定している一方で、合格に相当する学生の成績区分の判定については、共通の判定基準を設定することが難しく個別の担当教員の判断基準に委ねざるを得ない状況であった。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

インターンシップ、フィールドワークの成績区分の判定基準の作成において、「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」という観点からの基準作成が困難であった。分野横断的なプロジェクトワークを実施すること自体には学生からの一定の評価が得られたが、成績評価を実施する教員が同席することは難しく、従来通りの報告書の内容、受入機関担当者の評価に基づいて成績評価を行うこととなった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

問題解決のため、まず可否の判定基準は付与する単位数に相当する実習時間の確保、プログラムの内容、報告書の提出等を運営担当委員会により統一的に評価することで一定の厳格性を担保できたと考える。一方で、成績区分の判定においては指導教員の裁量に委ねる形を最後まで改善することができなかった。当初から統一的な成績評価指針、基準を策定しておけば、ある程度本事業の意義を成績評価に導入できたと考えられる。

●青山学院大学 国際政治経済学研究科

「グローバル・エキスパート養成プログラム」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

専攻横断型のプログラムは、各専攻に付加する形で設定されるので、入学時は従来の専攻に所属し、かつ選考も当該部門の教員が判断するので、初年次プログラム

固有の判断基準を設定することが困難であった。また入学後は、いわば現住所がプログラム所属になるので、指導体制の責任部署、修士論文の指導体制と最終成績評価時における教員構成と評価基準についての整備に時間がかかった。

苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

入学選考時には、既存専攻のポリシーと当プログラムと選考基準のすり合わせに苦労した。また、当プログラムを担当するプロジェクト教員を採用したが、身分的には非常勤扱いであったので、入試時における関わりの範囲に制約を受けざるを得なかった。また論文指導教員となる場合にも、主査1、副査2からなる集団指導体制をとる場合に、主査になることができず、必ずしも十分な指導を行う体制にはなっていなかった。制度改正するには、すでにプログラムが始まっていたので後手に回ってしまった。支援期間がさらに1、2年あれば対応できたが、期限切れであった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

プログラム内容の充実に注力していたので、選考時と終了時の基準と人事体制が不備であった。二年目からは、選考時の態勢の整備はなされ適切な選考基準の下で実行できたが、実践に基づいた論文指導は実務家と専任教員との連携をさらに工夫していく必要性を学んだ。院生からも、両者の指導の視点の違いに戸惑うケースが見てとれた。また、所属問題として、既存の専攻入試ではなくプログラム選考入試の確立が要望され、入学後も名実ともに専攻にすることへの要望が出てきた。

●**京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻**
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

建築の保存・再生の事業に実際に参加する問題解決型のフィールド実習をプログラムの中核とし、成績評価については、その成果を中心にまとめたものを評価することで行った。そのために、論文としてまとめたもの以外に、建築や集落の再生設計図面やビジュアルなプレゼンテーションも評価に含めることにしたが、その評価基準を明確化することに苦労した。特に博士前期課程では、すでに設置されていた特定課題コースを利用して、いわゆる修士設計を目指すプロセスを導入したが、その場合の設計評価と論文との関連の評価のために設けた基準をどこまで厳格化できるかが大きな課題となった。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

研究論文の評価と建築設計図面の評価では、評価基準が大きく異なることになる。前者が論理性や実証性に基づくものになるのに対し、後者は美的な評価や社会的貢献度やその可能性についても問われることになる。博士學位論文については、後者での評価の経験を積重ねた上で、それも含めて研究論文型式としたものを、あくまで学術論文として評価することにし、それは妥当な評価方法になりえたが、それまでの設計提案も含む評価の基準を作るのは難しく、調査と分析だけに優れたものと、設計の提案だけに優れたものをどのように評価するかが難しくなった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

とりわけ難しかったのが、実習の成果として提出させた建築設計に対する評価である。これについては、当初から担当教員だけではなく、事業に関わる多くの関係者による複数の観点からの評価をまとめるために、いわゆるオープンジュリーの方法を講じたが、それを重ねても、客観的な評価基準を厳密な形で構築することは難しかった。これについては、オランダなどの海外の同じ分野での教育方法などの情報を積極的に集めたが、さらに広範な情報収集と、保存・再生学のさらなる深化を進める必要があることが確認されている。

●久留米大学 医学研究科**「感染制御看護師（ICN）養成プログラム」の事例 <医療系>****具体的に何を実施し、何が困難であったのか**

本プログラムの学位授与は、課題研究報告または修士論文のいずれかにより審査を行っている。課題研究報告の審査基準は定められておらず、教員全てが合意できる審査結果が得られない例がある。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

本プログラムにおける学位授与においては、課題研究が、文化人類学、保健システム、看護実践、感染症など多様であるため、これまでの医学的研究の審査基準に沿って学位審査を行うことが適切でない場合があるため。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

指導教員の意見を十分に取入れたうえでの判断がなされてはいるが、大学院生からも研究課題選択においての迷いの声が聞かれる。長期のフィールドワークで構成したプログラムであることも鑑み、フィールドにおける症例研究を重視し、課題研究を含めた審査体制の構築と明確化が必要である。